



第102代土木学会会長 磯部 雅彦

[聞き手] 清水英範 土木学会誌編集委員長

100年後の子孫に引き継ぐ
美しく、安全で、いきいきした
国土をつくるのが土木の使命です

土木工学の
シソーラスづくりが
とても勉強になった

——会長へのご就任、おめでとうございます。まず、会長のこれまでの土木学会との関わりについて、また、その中で特に印象に残っているお仕事などあれば、お話しいただけますでしょうか。

磯部——土木学会は、私が大学院生で初めて入った学会であり、論文発表やさまざまな活動をはじめ、海岸工学委員会委員長、土木学会誌編集委員会幹事長、論文集編集委員会委員長、そして理事や副会長などの役職も務めてきましたので、思い出は尽きません。ただし、その中で一つを挙げるとすれば、80周年記念で三浦裕委員長のもと『土木工学ハンドブック』のキー

ワードを樹形図化したシソーラスをつくったことです。それらの過程で土木工学の体系がどうなっているのかを勉強でき、自分にとって非常に役に立ちました。このような活動ができるということは土木学会の利点だと思います。

100周年を起点に
土木の未来を示す

——会長の任期は1年です。重点的にどのようなことに取り組まれるおつもりでしょうか、方針をお聞かせください。

磯部——重点項目の第一としては、土木学会100周年記念行事を盛大なものとして成功させたいということに尽きます。クライマックスは11月21日の東京国際フォーラムでの「100

周年式典」になりますが、そこに向けてすでに100周年記念行事がいろいろ進んでいます。全国八つの支部での「土木コレクション」、「どぼくカフェ」の開催、9月1日に日本郵便から発売される「土木学会創立100周年記念切手」の発行などを通じて、広く一般の方々にも土木への理解を深めていただければと思っています。また、土木学会では現在「土木学会の将来ビジョン」(仮)を策定しており、式典ではそれらに基づいて「100周年宣言」を行います。私は土木学会で初の戦後生まれの会長になります。戦前の世代と違い私たちの世代は飢えやひもじさというものを経験したことがありませんし、今や価値観が多様化し、国や世界がどのような方向に向かっているかわかりにくくなっています。そうした中でも、



[日時] 2014年6月17日(火)
土木学会役員会議室にて

100年後の子孫が飢えることなく、災害に苦しむこともなく、幸せを追求しながら生きていけるような基盤をつくるのが私たちの使命であると思っています。持続可能な社会づくりをキーワードに、土木や土木学会のこれからの方向を指し示し、国民に理解してもらおうとともに、若い人たちが土木をやりたいと志してもらえるようにしていきたい。私自身としては、そのためのきっかけとして100周年をとらえています。

多様化にも 意義はあるが、 総合性の可視化も必要

——土木学会には現在、調査研究部門に限っても29もの委員会があります。土木の分野がますます多様化していることの特徴だと思いますが、逆に土木の総合性が見えにくくなっているような気がします。各委員会の活動には重複も多いので、もう少し整理統合してもよいのではという意見もあります。会長はどうお考えでしょうか。

磯部——確かに調査研究部門の委員

会の中には内容的にやや重なるような委員会もあります。企業的なセンズで言えば整理統合してもいいのではないかという話になりますが、私は重複してもいいと思っています。土木学会というのは、基本的には活動したい、あるいは活動に意義があると思っ人が積極的に参加しているボランティア集団です。企業のように活動に対して対価が伴うというのであれば、効率を最大限高め、無駄を省き、合理化をすることは必要ですが、そこは異なります。もちろん、事務的なコストには会員のお金が充てられるわけですから、度を越してはいけないということも当然です。細分化され、土木の総合性が見えにくくなっているという点では、やはり知識を集約して可視化していくという努力も必要だと思っています。

できるだけ難しい 内容をやさしく書く

——土木学会、また土木界において、土木学会誌の果たすべき役割について、ご教示いただけますでしょうか。

磯部——今の土木学会誌の編集方針はそのまま続けていただきたいですし、常に新しい大事な情報を載せ、今どんなことが話題になっているかということがわかるようにしていただけたらと思っています。ただし、できるだけ最先端の難しい内容をできるだけやさしく書いて欲しい。やさしいことをやさしく書くのは誰にでもできます。難しいことを一般の会員や市民にもわかるように努力してやさしく書いて欲しいというのが私からのお願いです。本当によくわかったことはやさしく書けますし、やさしく喋れるものです。書き手の力量を問うことにもありませんが、それができれば土木学会誌は本当に質の高いものになります。

——身の引き締まる思いがします。先ほど、知識を集約して可視化していく、というお話もございました。総合技術なるがゆえの土木の難しさ、総合技術だからこそ土木の魅力を読者の皆様にはわかりやすくお伝えできるよう、努力したいと思います。本日はありがとうございました。

「執筆」駒崎 文男
「撮影」大村 拓也